

編集後記

明治学院大学は、日本近代音楽財団より貴重資料を受け入れ、大学図書館付属「日本近代音楽館」を二〇一一年五月に開館した。山田耕筰から武満徹に至る百名を超える作曲家の自筆譜コレクションを中心とする貴重資料約五〇万点は、まさに日本近代の音楽史、文化史の構築に向けての第一級の資料である。

言語文化研究所は、二〇一一年度の明治学院大学・港区民大学公開講座のために六回の講演会『近代日本と西洋音楽』を企画とした。本特集はその報告にはかならない。

第一回『近代日本の洋楽受容』（十月十一日・火）は、企画担当の樋口隆一（本学文学部教授）による概説である。一八六三年に横浜に創設されたヘボン塾では、クララ・ヘボンの指導のもと、日

本の子供たちが英語の讃美歌を歌い始め、オルガンの指導が始まった。明治学院は二〇一三年に一五〇周年を迎えるが、同年はその意味でひとつの「日本の洋楽一五〇周年」でもある。

第二回『ヘボン塾と明治の讃美歌』（十月十四日・金）を担当された手代木俊一氏（明治学院歴史資料館研究員）は、言うまでもなくわが国における讃美歌研究の第一人者である。ヘボン塾関係者によって初期の讃美歌翻訳が行われた軌跡を簡潔に示して下さった。

第三回『島崎藤村と西洋音楽』（十月十八日・火）を書かれた岩田ななつ氏（本学教養教育センター非常勤講師）は日本文学研究者の立場から、藤村の音楽家志望とその挫折を、短編小説『少年』のみごとな分析によって明らかとされた。明治学院大学図書館収蔵の自筆原稿「耳の世界」について、その内容と意義について論じられた。

第四回『日本の洋楽の現在と未来』（十月二十一日・火）を担当された岡部真一

郎氏（本学文学部教授・日本近代音楽館副館長）は、現代音楽の研究者・評論家として、日本の作曲界の現在と未来への展望について語られている。

第五回『鈴木鎮一と日本のヴァイオリン教育』（十月二十五日・火）を論じられた久保絵里麻（えりあ）氏は現在、鈴木鎮一に関する博士論文を準備中の若い研究者。鈴木木の才能教育の本質を明らかにしてくれた。

第六回『日本の二十世紀音楽』断章——瀧廉太郎から武満徹まで』（十月二十八日・金）を担当された林淑姫氏（本学文学部客員教授）は、かつて日本近代音楽館主任司書としてコレクションの形成に尽力してこられた。東洋と西洋の関係の変遷を滝、山田、深井、武満という四人の作曲家を通して分かりやすく論じられた。寄稿者各位に心から感謝したい。

（樋口隆一）



日本の西洋美術史研究におけるジェンダー論・フェミニズムの側面を二〇一一年という時点でまとめてみたいという気持ちは、この年の初頭に筆者の内部でかたちを取った。日本には西洋美術史研究者は多数存在し、著書、翻訳、論文なども日々発表されている。だがそれにもかかわらず、その多くは扱っているテーマに関して欧米諸国で行われているジェンダー・フェミニズム系の研究を紹介するどころか、まるで存在しないかのように無視している。他方そうした視点をもちつづけている女性の研究者たち（残念なことに、日本の男性研究者でこのような視点をもつ人はほとんどいない）の論考は、大学の紀要や調査研究報告書などあまり人目につかないメディアに埋もれてしまい、研究者同士でも気づかないことしばしばである。彼女たちに一堂に集まって頂いて、その研究の一端を語って欲しい、つまりシンポジウムを開催したい。これが私の願いとなった。

とはいえ、各地に散らばり、テーマも

多様な彼女たちの活動の全容を私が把握しているわけではない。それで二〇一一年の早春、東北地方太平洋沖地震の少し前から、日本女子大学の馬淵明子さん、お茶の水女子大学の天野知香さんに相談相手になって頂いて、シンポジウムの最終的タイトル「西洋美術とジェンダー——視ることの制度」と、六名のパネラーを決定した。馬淵さんと天野さんはそれぞれ当日の午前と午後の司会も引き受けて下さった。

シンポジウムの全容は『言語文化』本号に掲載されているので、ここではもうその内容には触れない。一言だけつけ加えるなら、当日は常時一〇〇名ほどの聴衆が熱心に参加して下さい、パネラーを中心とする打ち上げでも共通の課題についての熱っぽい会話が続いた。このシンポジウムは、西洋美術とジェンダー論への関心を共有する全国に散らばるベテランから若手にいたる研究者たちの存在感を示し、今後の交流の機会となったのではないかと自負している。

末筆になったが、主催機関である明治学院大学芸術学科と言語文化研究所のスタッフの方たち、アルバイトの方たちの献身的な努力なしにはこの催しは開催できなかつたというのが実感である。また共催に加わって下さったイメージ&ジェンダー研究会、日仏美術学会の力添えに対しても感謝を捧げたい。

（鈴木杜幾子）



『言語文化』第二十九号をお届けする。今年度の言語文化研究所は港区民大開講座「近代日本と西洋音楽」を担当するとともに、本学芸術学科との共同主催でシンポジウム「西洋美術とジェンダー——視ることの制度」を開催した。本号はこの二つの催しを特集として収録している。また「ホメーロス輪読会」の講師生田康夫氏には、前号にひきつづいてホメーロス関係の論文を寄稿していただいた。

二〇一一年度の当研究所のそのほかの活動についても簡単に報告しておきたい。

まず十月八日には白金キャンパスのアートホールにおいて、芸術学科との共催で錬肉工房による現代能『春と修羅』の公演をおこなった。宮沢賢治の言語世界を舞台化する斬新な試みで、女流能楽師の第一人者鶴澤久氏をはじめ、現代演劇の第一線で活躍する古屋和子氏、横田桂子氏などすぐれた女性表現者たちのご参加を得て、多くの観客から高い評価をいただいた。構成および演出は岡本章氏(芸術学科教授)、音楽は望月京氏(芸術学科准教授)。

一昨年からはじまった「明治学院ケルティック・クリスマス」は、すでに本学の恒例行事となった感があるが、今年は十二月七日に横浜キャンパスで、大竹奏氏(フィドル)と寺本圭佑氏(アエリックス・ハープ)によるケルト音楽レクチャーコンサート、十二月十二日には白金キャンパスで、両氏および山口亮志氏(

ギター)によるスコティッシュ・ダンス・ワークショップとケルト音楽コンサートをおこなった。なお寺本圭佑氏は本学文学部の非常勤講師である。

音楽関係の催しとしてはさらに十二月十五、十六日に、白金・横浜両キャンパスにワイマール音楽大学研究員ニコ・トーム氏をお招きして、「二十一世紀ヨーロッパのポピュラー音楽」と題する講演会を開催した。通訳は本学歴史資料館研究調査員の加藤拓未氏。

二月十四日から十六日にかけては、ポール・ハラ氏(英文学科教授)の企画によるユニークなパフォーマンスイベント「[INTERRUPTED LANDING]」を、アートホールで開催した。会期中はハラ氏の詩作品に発する映像・詩朗読・音響を組み合わせたヴィデオ作品が上映され、最終日には美術作家スーザン・モワット氏によるこの共同作品についてのレクチャー、ついでハラ氏とロックミュージシャンのデイヴィー・ヘンダーソン氏によ

る詩の朗読とギター演奏を織り交ぜた音響の風景が展開された。

二〇一一年は大震災の年としてすべての日本人の記憶に刻まれることとなってしまったが、当研究所ではそれからちょうど一年後の三月十一日に、アートホールで「東日本大震災追悼レクチャーコンサート」〜戦国時代の日本とハープ音楽〜を開催した。スペインの金属弦ハープ演奏家ビセンテ・ラ・カメラ氏をお招きして、中世スペインのビエドラ・ハープとイタリアで発展したアルパ・ドツピアの演奏、および古いハープについての講演をおこなっていただいた。司会・解説は寺本圭佑氏。

こうした催しごとのほか、日常的な活動として、「ホメーロス輪読会」「記号哲学研究会」「言語学基礎講座」「タイ語講座」など多くの研究会・読書会が今年度も活発に続けられたことは言うまでもない。

(朝比奈弘治)